

解答編

英語

I 解答

- A. (X)—4 (Y)—1 (Z)—4
 B. (a)—4 (b)—3 (c)—3 (d)—2 (e)—2 (f)—4
 (g)—3 (h)—2
 C. (ア)—1 (イ)—1 (ウ)—1 (エ)—3
 D. (う)—7 (お)—4 E—3・4・6

◆全訳◆

『英国人が最も頻繁に使う言葉』

それはおそらく英国で最も過度に使われている単語であろう。つまり、英国人が天気について残念であろうが、誰か他の人が自分にぶつかったためにすまないと思おうが、おそらく平均的な英国人は直近1、2時間に少なくとも1回は謝罪をうっかり口に出してしまっている。1000人以上の英国人に対する最近の調査によると、平均的な人は1日に約8回「失礼」と言い、8人のうち1人が1日に20回まで謝っているということだ。「英国人が自分たちのしていないことに対して謝罪する時の潔さは目を見張るほどであり、自分たちがしたことに対して謝罪する時の渋りように匹敵する」とヘンリー=ヒッチングズは巧みに題された『失礼！：英国人とそのマナー』の中で書いた。

だが、英国人は本当に他の文化の人々よりももっと頻繁に謝罪するのか。もしそうなら、この奇妙ななかなか直らない口癖の理由は何か。……そしてそれはどのくらい悪い習慣であるのか。さまざまな国で謝罪の頻度に関する信頼できるデータを得ることは、あなたが考えているよりは難しい。「確かに、カナダ人と英国人はアメリカ人よりももっと謝罪をするという推測はあるが、説得力のある証拠を提供するようなやり方で研究することは難しい」と、謝罪と許しについて研究するピツツバーグ大学の心理学者、カリーナ=シューマンは言う。1つの手段は、仮定的な状況で人々がどう

するかを尋ねることである。たとえば、1600 人以上の英国人と 1000 人以上のアメリカ人に対する最近のユーガブの世論調査によって、くしゃみをした場合とか、誰かの間違いを訂正する場合とか、誰かがぶつからってきた場合とかに、10 人のアメリカ人が謝罪すれば、15 人の英国人が謝罪するということが明らかになった。だが、その調査によって、英国人とアメリカ人の回答者の間の類似性もまた明らかになったのである。つまり、両方の国で 4 分の 3 たらずの人たちが、誰かを邪魔する時に「失礼」と言い、そして、アメリカ人の 74 パーセントに比べて、英国人の 84 パーセントが会議に遅れたことに対して謝罪するということだ。

しかしながら、仮定的な状況でどうするかと人に尋ねることは、実生活でどうするかを測定することとは非常に異なる。さっきの例を取り上げてみよう。ユーガブの世論調査で、アメリカ人の 24 パーセントに比べて、英国人の回答者の 36 パーセントは、誰か他の人の不注意に対して謝罪するとわかった。だが、『英国人を眺めて』という本の中で、社会人類学者のケイト＝フォックスは、イギリス中の町や都市で何百人もの人たちに彼女が故意にぶつかった実験について述べている。彼女はまた、比較のために、海外で同じことをするように同僚たちに勧めた。フォックスは気づいたのだが、彼女がぶつかった英国人の約 80 パーセントは「失礼」と言った——ぶつかったことは明らかにフォックスの過失であったとはいえ。しばしば英国人たちはその謝罪をつぶやいた。おそらく人々はそのことに気づきさえしないで言ったのであろう。だが、他の国々からの観光客とぶつかった時と比較すると、その違いは著しかった。「日本人だけが英国人の失礼と言う反射的行動に近いところがあるように思われた」と、フォックスは記している。

「失礼 (sorry)」という単語の起源は、「苦しんで、悲しんで、悲しみで一杯の」という意味の古代英語の *sarig* にさかのぼるかもしれないが、もちろん、ほとんどの英国人はその言葉をもっと何気なく使う。そして、この点において、言語における文化的相違の研究に関する別の問題があるので。「私たちは、さまざまな意味で『失礼』という言葉を使う」と、エドワイン＝バテステラは言う。彼は南オレゴン大学の言語学者であり、『それについて失礼：社会の謝罪の言語』の著者である。英国人は、非常にしばしば「失礼」と言うかもしれないが、だからといって、このことが必ず

しも、英国人がより後悔していることを意味しているとは限らない。「私たちは、共感を表現するためにその言葉を使うこともできる——だから、私は『雨で残念(sorry)』と言うかもしれない」とバステラは言う。「おそらく英国人とカナダ人がその種の『失礼』をもっと頻繁に使うが、彼らは本質的に謝罪していないだろう。他の研究者たちは、社会階級間での意思疎通における『失礼』の使い方について議論してきたが、そこでは、人々は特権に対して幾分謝罪しているのである」

イギリスの社会は、その構成員が他の人の個人的な空間を侵害することなく、そして、自分自身に注目を引きつけることなく、尊敬を示すことに価値を置いている。すなわち、言語学者が「否定的ポライトネス」や「否定的顔」と呼ぶ特性である。他方、アメリカは肯定的ポライトネスの社会であり、その特徴は友好的であることと集団の一部であると感じたいという欲求である。結果として、英国人は、アメリカ人を含めて部外者には不適切と思われるかもしれないやり方で、「失礼」を時々使うかもしれない。英国人が知らない人に「失礼」と言うのは、ある情報を求めたり彼らのそばに座ったりしたいからであり——そして、「失礼」と言わないことは他人のプライバシーをさらにもっと大きく侵害することになるからであろう。「私たちが過度に、しばしば不適切に、そして時としてまったく誤解を招くようにこの言葉を使えば、その言葉の価値は貶められるだろう。そして、そのために、私たちのやり方に慣れていない外国人にとって、状況が非常に混乱したり困難になったりするであろう」とフォックスは言う。さらに彼女はつけ加えて言う。「いつも『失礼』と言うことがそんなに悪いことではないと思う。否定的ポライトネスの文化という状況では、実に理にかなっている。一国民がこんなに手あたり次第に過剰に使用してばらまくことが選べるすべての言葉の中で、『失礼』は確かに最悪の言葉ではない」

「失礼」ということにはまた他の利点もあるかもしれない——たとえば、信頼を育むこと。面白いことに、自分がした間違いのためではなく、むしろどうしようもない状況のために、人々が謝罪している時でさえ、そのことが言えるのである。ある研究で、ハーバード・ビジネス・スクールのアリソン＝ウッド＝ブルックスとその同僚たちは、男性の俳優を雇って雨の降る日にアメリカの駅で65人の見知らぬ人に近づいて電話を貸してくれるように頼んでみた。半分の場合に、その俳優はお願ひを「あいにくの雨

で」という言葉で始めた。彼がこうした時、見知らぬ人の47パーセントが彼に携帯電話を貸してくれた。これと比較して、単に電話を貸してくれるよう頼んだ時には、9パーセントの人しか貸してくれなかつた。さらなる実験によって、重要なのは天候についての謝罪であつて、初めの言葉の礼儀正しさではないことが確認された。「『あいにくの雨で』と言うことによつて、不必要に謝罪する人は、不運な状況を認め、被害者の視点に立ち、否定的な状況への共感を表現するのだ——たとえそれがどうにもできないことであるとしても」と、ウッド=ブルックスは言う。

◀解説▶

A. (X)空所の前の文である調査方法を述べ、空所の後で、その具体的な例を紹介しているので、4のFor instance「たとえば」を選ぶ。1. 「とりわけ」 2. 「要点がずれて」 3. 「対照的に」

(Y)前段の第2段(But do the British ...)では、仮定的な状況での人々の行動についての話であったが、第3段((Y), asking someone ...)では実生活での行動の話であるので、前述の内容と対照的なことを述べる場合に使われる副詞の1. However を空所に入れる。2. 「加えて」 3. 「同様に」 4. 「したがって」

(Z)前文(British society values ...)でイギリス社会、当該文(America, (Z)...)でアメリカ社会とその違いを述べているので、4. on the other hand 「他方」を選ぶ。1. 「結果として」 2. 「同じ理由で」 3. 「換言すれば」

B. (a)peculiarは「奇妙な、一風変わつた」という意の形容詞で、これに最も意味が近いのは、4. strangeである。1. 「嫌悪すべき」 2. 「普通の」 3. 「正統派的な」

(b)compellingは「説得力のある、納得できる」という意の形容詞。この意味に最も近いのは、3. persuasive「説得力のある」である。1. 「獰猛な、激しい」 2. 「理論的な、仮説的な」 4. 「頑固な」

(c)markedは「著しい、顕著な」という意の形容詞で、動詞の過去分詞が形容詞に転用されたものである。これに最も近いものは、3. notable「注目すべき」である。1. 「彫られた」 2. 「調べられた」 4. 「微妙な」

(d)remorsefulは「深く後悔して」という意の形容詞で、これに最も意味

が近いのは、2. *regretful* 「後悔して」である。1. 「心配して」 3. 「尊敬して」 4. 「心配して」

(e) *imposing on* は *impose on* ~ 「～を侵害する、～につけこむ」という意の動詞の動名詞で、これに最も意味が近いのは、2. *intruding into* ~ 「～を侵害すること」である。1. 「～に依存すること」 3. 「～を軽蔑すること」 4. 「～を重視すること」

(f) *constitute* は「～を構成する」という意の動詞。これに最も意味が近いのは、4. *represent* 「～を表す」である。1. 「～を隠す」 2. 「～を治める」 3. 「～を正当化する」

(g) *excessive* は「過度の」という意の形容詞で、これに最も意味が近いのは、3. *unrestricted* 「制限のない」である。1. 「すばらしい」 2. 「恐ろしい」 4. 「異様な、不気味な」

(h) *preceded* は「～を始めた」という意味を持つ動詞の過去形で、ここでは *precede A with B* という形で「A を B で始める」という意の定型表現として用いられている。この *preceded* に最も意味が近いのは、2. *introduced* 「～を始めた」である。ちなみに、この単語にも *introduce A with B* という形で「A を B で始める」という使い方をする定型表現がある。1. 「～を飾った」 3. 「～を強化した」 4. 「～を弱めた」

C. (ア) 波線部は「おそらく～であろう」という意味の定型表現である。波線部の意味・内容を最も的確に示すものは、1. 「おそらく～であろう」という意の定型表現である。2. 「～は必然である」 3. 「～は運がよい」 4. 「～は不運である」

(イ) 波線部は「～に近いものがあるように思われた」という意味である。*approach* 「～にはぼ等しくなる、近づく」 よって、波線部に意味が最も近いのは、1. 「～に幾分類似したやり方で反応するように思われた」である。*appear to do* 「～するように思われる」 2. 「まるで～とはまったく異なる方法で謝罪するように見えた」 *as though* ~ 「まるで～であるかのように」 3. 「～に対して、『失礼』と言わないことを明らかにした」 4. 「～よりももっと多様なやり方で謝罪することを暗示した」

(ウ) 波線部は「～を辺りに散らかすことを選ぶ」という元の意味から、「～を非常にしばしば口にすることを選ぶ」という意味である。よって、波線部に意味が最も近いのは、1. 「あまり考えることなく使うことに決める」

- である。2. 「～を使う時と場所を調整する」 3. 「～の意味を誇張する」
4. 「否定的な身振りをしてしばしば～を使う」

(エ)波線部は「犠牲者の視点に立つ、見方をする」という元の意味から、「電話を貸してくれるよう頼まれた人の見方をする」ということを意味する。よって、波線部に意味が最も近いのは、3. 「相手の観点を共有する」である。1. 「その不運な人の絵を描く」 2. 「いきなり相手の視界を遮る」 without warning は「いきなり」という定型表現。4. 「悪い気象状況について話し合う」

D. 最終段の二重下線部の前の部分で、「携帯電話を貸してくれるよう頼む前に “Sorry about the rain.” と言ったほうが、ずっと多くの人が携帯電話を貸してくれた」という記述がある。この内容から、二重下線部の意味を考える。空所(あ)の前に、it was があり、選択肢の中に、that があるので、it was ~ that … という強調構文ではないかと考える。次に、mattered の意味が「重要であった」と理解できると、空所(え)・(お)に that mattered が入るのではないかと見当がつく。さらに、空所(あ)の前の the によって、空所に名詞が入るのではないかと推測し、apologyを入れる。次に、空所(い)・(う)に the weather を入れれば、the apology about the weather 「天候についての謝罪」となり、“Sorry about the rain.” との一貫性が出る。よって、Further experiments confirmed it was the apology about the weather that mattered, not the politeness of the opening sentence. 「さらなる実験によって、重要なのは、天候についての謝罪であって、初めの言葉の礼儀正しさではないことが確認された」となる。

E. 1. 「最近の統計によると、英国人の8人のうち1人は、他の文化の人たちの約8倍『失礼』と言う」 このような記述は本文にない。

2. 「最近の世論調査によると、アメリカ人よりも多くの割合の英国人が、他の人たちの邪魔をした時に『失礼』と言う」 第2段第7文 (But the survey found … for interrupting someone.) と矛盾する。

3. 「インターネットによる調査と比較すると、実際には、2倍以上の人数の英国人が、他の人がぶつかってきた時、『失礼』と言った」 第3段第2文 (Take the last example ...) にあるように、ユーガブによるインターネット調査では、「失礼」と言うと回答したのは36パーセントだが、第3段第5文 (Fox found that ...) に記されている実際にぶつかった実験

では約 80 パーセントであり、36 パーセントの 2 倍以上であるので、本文の内容に一致する。

4. 「英国人は、元の意味にこだわらずに、日常生活で相当何気なく『失礼』という言葉をしばしば用いる」 第 4 段第 1 文 (The origins of the word … the word more casually.) と一致する。

5. 「数人の研究者によると、イギリスでの社会階級間の意思疎通は、『失礼』という言葉を使っても役に立たない」 第 4 段最終文 (Other researchers have talked … apologizing for your privilege.) と矛盾する。

6. 「英国人が『失礼』をしばしば用いる 1 つの理由は、その言葉を口にすれば、他の人のプライバシーを侵害するショックを和らげると英国人が信じていることである」 第 5 段第 4 文 (The British will say … that stranger's privacy.) と一致する。

7. 「英国人は、英國社会の否定的ポライトネスの側面のために『失礼』と言うのを止めるべきだと、フォックスは信じている」 第 5 段第 6 ~ 最終文 (Still, she adds … 'sorry' is not the worst.) と矛盾する。

8. 「もし英国人が自分がどうしようもないことに謝罪するならば、そのために、謝罪している人はもっと疑わしく思われる」 第 6 段第 1 ・ 2 文 (There may be other benefits … circumstances beyond their control.) と矛盾する。

英語

(100 分)

[I] 次の文章を読んで設問に答えなさい。 [*印のついた語句は注を参照しなさい。] (70点)

It is probably the most over-used word in the United Kingdom: whether they are sorry about the weather or sorry because someone else has bumped into them, chances are your average Briton* has blurted out* at least one apology in the past hour or two. A recent survey of more than 1,000 Brits found that the average person says "sorry" around eight times per day—and that one in eight people apologizes up to 20 times a day.] The readiness of the English to apologize for something they haven't done is remarkable, and it is matched by an unwillingness to apologize for what they have done, wrote Henry Hitchings in his aptly-titled* *Sorry!: The English and Their Manners*.

But do the British really apologize more frequently than members of other cultures? (If so,) what's the reason for this peculiar verbal tic*... and how bad a habit is it? [Getting reliable data on the frequency of apologies in different countries] is harder than you might think. "There's certainly speculation [that Canadians and Brits apologize more than Americans], but it's difficult [to study in a way] that would provide any compelling evidence," says Karina Schumann, a psychologist at the University of Pittsburgh who studies apologies and forgiveness. One approach is [to ask people what they'd do in a theoretical situation]. (For instance, a recent YouGov* poll of more than 1,600 British people and 1,000 Americans revealed that there would be approximately 15 British "sorries" for every 10 American ones [if they sneezed], [if they corrected someone's mistake], or [about ① ②].

(if someone crashed into them.) But the survey found similarities between the British and American respondents, as well: just under three-quarters of people from either country would say "sorry" for interrupting someone. And 84% of Brits would apologize for being late to a meeting, (compared to 74% of Americans.)

However

Y), [asking someone what they'd do in a theoretical situation] is very different to measuring [what they'd do in real life.] Take the last example, (in the YouGov survey,) 36% of British respondents said [they would apologize for someone else's clumsiness, compared to 24% of Americans.) But (in her book *Watching the English*,) social anthropologist* Kate Fox describes experiments in which she deliberately bumped into hundreds of people in towns and cities across England. She also encouraged colleagues to do the same abroad, for comparison. Fox found that around 80% of English victims said "sorry" — even though the collisions were clearly Fox's fault. (Often) the apology was mumbled, and possibly people said it without even realizing it, but (compared to) when tourists from other countries were bumped, the difference was marked. "Only the Japanese seemed to have anything even approaching the English sorry-reflex," Fox writes.

The origins of the word "sorry" can be traced to the Old English "sarig" meaning "distressed, grieved or full of sorrow," but (of course,) most British people use the word more casually. And (herein*) lies another problem with studying cultural differences in languages. "We use the word 'sorry' in different ways," says Edwin Battistella, a linguistics expert from Southern Oregon University and author of *Sorry About That: The Language of Public Apology*. Brits might say "sorry" more often, but this doesn't necessarily mean [they're more remorseful.] "We can use it to express empathy* — so I might say 'sorry about the rain,'" says Battistella. "It might be [that British and Canadian speakers use that kind of 'sorry' more often,] but they wouldn't be apologizing, per se*. Other researchers

have talked about the use of 'sorry' to communicate across social classes
where you're sort of apologizing for your privilege."

11月25日

British society values [that its members show respect without imposing on someone else's personal space, and without drawing attention to oneself] characteristics that linguists refer to as "negative-politeness" or "negative-face." America, (Z), is a positive-politeness society characterized by friendliness and a desire to feel part of a group. (As a consequence,) Brits may sometimes use "sorry" in a way that can seem inappropriate to outsiders, (including Americans.) The British will say "sorry" to someone they don't know because they'd like to ask for some information, or to sit down next to them, and because [not saying 'sorry'] would constitute an even greater invasion of that stranger's privacy.) "Our excessive, often inappropriate and sometimes downright* misleading use of this word devalues it, and it makes things very confusing and difficult for foreigners unaccustomed to our ways," says Fox. Still, she adds, "I don't think [saying 'sorry' all the time] is such a bad thing. It even makes sense in the context of a negative-politeness culture... (Of all the words that a nation could choose to scatter about with such random profligacy), surely 'sorry' is not the worst."

There may be other benefits to saying "sorry," too — such as fostering trust. Interestingly, that is true (even when people are apologizing not for mistakes they've made, but rather for circumstances beyond their control. (In one study,) Harvard Business School's Alison Wood Brooks and her colleagues recruited a male actor to approach 65 strangers at a U.S. train station on a rainy day and ask to borrow their telephone. (In half the cases,) the actor preceded his request with: "Sorry about the rain." (When he did this,) 47% of strangers gave him their mobile, (compared to only 9% when he simply asked to borrow their phone.) Further experiments confirmed [it was] the (apology) about (the weather) (that) (mattered), not the politeness of the opening sentence. "By saying 'I'm sorry about the

rain,' the superfluous apologizer acknowledges an unfortunate circumstance, takes the victim's perspective ^(V1) and expresses empathy for the negative circumstance ^(V2) even though it is outside of his or her control," says Wood Brooks.

(By Linda Geddes, writing for *BBC Future*, February 24, 2016)

[注] Briton 英国人（短縮形は Brit）

blurted out (blurt out うっかり口に出してしまう)

aptly-titled 巧みに題された

tic なかなか直らない癖

YouGov インターネットを利用した世論調査会社

social anthropologist 社会人類学者

reflex 反射的行動

herein この点において

empathy 共感

per se それ自体で、本質的に

downright まったく

profligacy 過剰使用

I - A 空所(X)～(Z)に入るもっとも適切なものを次の1～4の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄に記入しなさい。

- | | | |
|-----|------------------|-----------------------|
| (X) | 1 Above all | 2 Beside the point |
| | 3 By contrast | 4 For instance |
| (Y) | 1 However | 2 In addition |
| | 3 Similarly | 4 Therefore |
| (Z) | 1 consequently | 2 for the same reason |
| | 3 in other words | 4 on the other hand |

I - B 下線部(a)～(h)の意味・内容にもっとも近いものを次の1～4の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄に記入しなさい。